

養老川流域の歴史散歩

— 土宇砦の領主はだれか —

中世期の土宇郷と丘陵台地の大城

平成28年12月

8日

総の国をかたる会

白鳥 元治

1. 東林寺背後の大城(字名)と称する台地

(1) 土宇砦を考える



東林寺付近

現養老川右岸に、土宇の丘陵が南北に京急カントリークラブ、上原方面へと延びている。旧養老川は、この丘陵の縁に沿って曲流を創っていた。この高台の一角に、東林寺と称するという寺院がある。「市原郡誌 養老村 口碑伝説」の項、「鶴城(うじろ)」に、「土宇区東林寺の後丘に字大城(おおじろ)と称する所あり、一般に昔時は鶴城とも云ひしと、古老の伝説によれば鎌倉の枝城たりしと、今其地を按ずるに前には養老川を控え川向うなる安須に要害と称する所あり、これ本城に対する要害の地なりと、近傍に大手坂・堀の内など称する地名あるを見てもいかに城址の存在せしかを知らる々なり〜」とある。「枝城」とは、根拠となる「根城」の外に築いた出城をいうのだが、「安須に要害の地」ありとしてこの城との関連を言っている。また安須集落に「要害」を屋号とする家が、存在している。また集落には、竹内さんという姓が四割近く在る。「竹内」とは、「館」からきているのではないかと、密かに推測しているが、「日本城郭体系」では「高坂砦」とし記述している。その遺構と想われる地は、谷を隔て「安須砦」であるが、一連の城郭であろうとする説がある。鎌倉期からこの地域一帯に、存在したと想われる館址を取り上げてみると、安須・高坂(字要害)・風戸(字宮ノ下、腰巻・・・日光寺)・中高根(字下ノ根、腰巻、貝堀坂・・・鶴峰神社)・上高根(字殿下、上本郷、下本郷、馬場台)・西国吉(字根本台)居下)・南岩崎(字報恩寺、榎戸、本郷、小勝山)・土宇堀ノ内・土宇砦(字大城台)・土宇頓木(字上ノ台)・松崎(字的場、堀合)・武士(字堀ノ内、腰巻)・新堀(字填台)・大桶(字城廻り、城跡)・・・等があげられる。遺構からみても小領主の館址といってよい。それぞれ、地の開発領主たちなのであろう。この中で砦跡と記して、土宇の「大城は鎌倉の枝城」と伝承があるように、城郭を想わせているものが土宇と、安須高坂の砦跡である。これまでの発掘調査の結果から一般的には、「堀の内」は南北朝期以降としているが、鎌倉後半期には存在していたかもしれない。日本城郭体系でいう縄張りをもつ「上高根城」は、さらに時代が下がり戦国期に入ってからであろう。大規模な上高根城の築城は、上総武田氏によるものという説がある。



東林寺

この本城に対する要害の地なりと、近傍に大手坂・堀の内など称する地名あるを見てもいかに城址の存在せしかを知らる々なり〜」とある。「枝城」とは、根拠となる「根城」の外に築いた出城をいうのだが、「安須に要害の地」ありとしてこの城との関連を言っている。また安須集落に「要害」を屋号とする家が、存在している。また集落には、竹内さんという姓が四割近く在る。「竹内」とは、「館」からきているのではないかと、密かに推測しているが、「日本城郭体系」では「高坂砦」とし記述

している。その遺構と想われる地は、谷を隔て「安須砦」であるが、一連の城郭であろうとする説がある。鎌倉期からこの地域一帯に、存在したと想われる館址を取り上げてみると、安須・高坂(字要害)・風戸(字宮ノ下、腰巻・・・日光寺)・中高根(字下ノ根、腰巻、貝堀坂・・・鶴峰神社)・上高根(字殿下、上本郷、下本郷、馬場台)・西国吉(字根本台)居下)・南岩崎(字報恩寺、榎戸、本郷、小勝山)・土宇堀ノ内・土宇砦(字大城台)・土宇頓木(字上ノ台)・松崎(字的場、堀合)・武士(字堀ノ内、腰巻)・新堀(字填台)・大桶(字城廻り、城跡)・・・等があげられる。遺構からみても小領主の館址といってよい。それぞれ、地の開発領主たちなのであろう。この中で砦跡と記して、土宇の「大城は鎌倉の枝城」と伝承があるように、城郭を想わせているものが土宇と、安須高坂の砦跡である。これまでの発掘調査の結果から一般的には、「堀の内」は南北朝期以降としているが、鎌倉後半期には存在していたかもしれない。日本城郭体系でいう縄張りをもつ「上高根城」は、さらに時代が下がり戦国期に入ってからであろう。大規模な上高根城の築城は、上総武田氏によるものという説がある。

いるのだろう。「大城」の地は、鎌倉幕府による統治されている領主館の遺構であろうか。市原郡誌「口碑伝説の鶴城」の項の文末に、大城のことを「～本城は何時代何人の居城せしかをしらるに由なしと雖も、思ふに北条氏或いは里見時代に於いて没落せしものならんか」とある。

4. 東条氏とは何者か

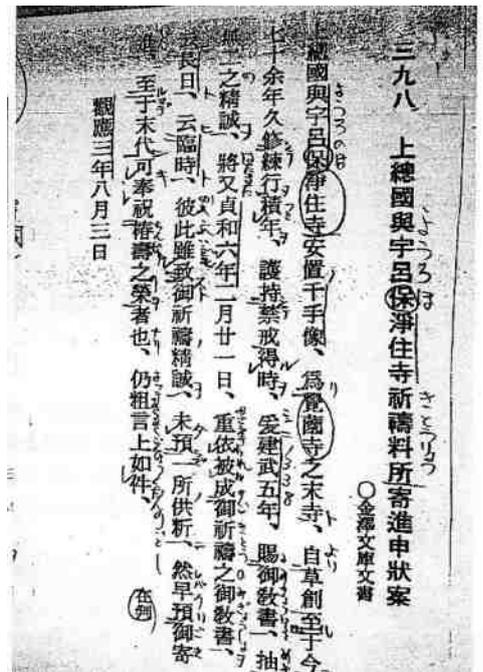
房総でいう東条氏とは、長狭郡域東条郷の武士である。源頼朝の挙兵から石橋山からの脱出、房州上陸から鎌倉幕府創立まで房総の武士たちは此のことに大きく関わってきた。安房を代表する武士として、安西氏・神余氏・丸氏そして東条氏が、鎌倉時代からそれぞれ幕府の御家人として知られる。長狭の地は、国造を祖とする長狭氏の根拠地であつが、安房に逃れ房総の武士を味方につけた源頼朝に滅ぼされた。後年一介の土豪であつた東条氏が、長狭の地で勢力の基盤を築いていったのだ。

長狭郡は、現江見地区を除いた鴨川市をいう。鎌倉幕府創立と共に、三浦氏の勢力下におかれたが、三浦氏滅亡により北条一門の名越氏が、東条郷へと進出した。その後東条氏は、北条氏の家臣としての結びつきを深めていったにちがいない。記録文書から、長狭の武士で東条景信という人物が、北条重時の家人となつて幕府の中で重要な位置まで進出していった。北条重時とは、執権北条泰時の弟である。この頃、東条景信は、「連署」という鎌倉幕府の職名を担っていた。執権北条氏の公文に連署する重責で、連判・合判・加判するようになっていたのだ。松崎郷の春日神社舊伝記の東条氏とは、この一族なのであろう。まだ鎌倉幕府創設期の頃で、千葉氏を始め房州の武士たちは、その功績から重用されていたに違いない。この東条氏とは、長狭郡の東条氏であることは間違いない。その後宝治合戦で幕府の実力者である三浦氏と、上総千葉氏が滅び北条氏が幕府の実権を握った。上総の千葉氏の旧領地でもあつたこの土宇の地に、北条氏の代官として家臣の一族の者か、東条氏とつながりの深い者かが、配置されたのではないかと推測できる。

5. 上総国與宇呂保淨住寺祈禱料所寄進申状案内から言えることは何か



寄進状案内のからみでみる。鎌倉幕府が崩壊した後、足利尊氏と直義兄弟が分裂し戦った「観応の乱」と言われる対立と闘争が続いた。鎌倉時代から北条氏の菩提寺覚園寺の末寺として浄住寺(現中高根の常住寺)は、上総国の祈禱所となっていた。三浦半島から海路を経て上総に上陸し、国府方面へと続く街道は、高坂辺りで枝分かれする(大道)して、通称「鎌倉街道」といわれているのだが、このことが北条氏の覚園寺の末寺として、上総国の祈禱所として位置付けられたのであろう。寄進状の内容を要約してみると、足利尊氏の命に従って祈禱をおこなったことと、祈禱の数を提出して恩賞として所領の寄進を願い出たものである。北条氏の菩提寺の末寺であるとともに上総国の祈禱所であつたが、その後も足利尊氏の祈禱所となっていたのである。このことから鎌倉時代、二日市場、土宇、高根の現三和地域一帯は、北条氏の支配下にあり、北条氏の家臣であつた代官東条氏の存在を認めていいのではなかろうか。さらに高坂砦と土宇砦が本城と枝城あつたといい、その領主が東条氏であるという伝承も史実とも推測もできる。



者と同一日付の祈禱要請文書には、足利尊氏の子息の義詮が称名寺末寺蒲里谷(横浜市金沢区)白山堂に天下静謐の祈禱を要請した文書がある。鎌倉幕府が崩壊し、やがて尊氏が支配権をにぎると、鎌倉にいた義詮が足利氏による東国支配の基軸をにない、貞和五(三三)年には京都にのぼって父尊氏を補佐した。文和三(三三)年に完成した覚園寺仏殿の虹梁(はり)には尊氏が自署しており、尊氏・直義兄弟が分裂して戦った観応の擾乱で、浄住寺は尊氏方の命令にしたがって祈禱を行い、祈禱証明の巻数を提出したとみられ、浄住寺は足利氏の祈禱所となっていた。この祈禱への恩賞として所領の寄進を願い出たのである。足利氏が強い影響をもった上総において、浄住寺はその拠点的役割を果たしたのである。(福島金治)

6. 砦と土宇の玉前神社そして高坂の玉前神社

城郭体系の土宇砦の項に、「～集落の東側にある玉前神社の祀られた独立小台地は、腰郭、堀などを残していることから、本来は城の一部と考えられる」とある。実際に現地に立ってみると境内の周囲には土塁らしきものが残っているようでもあるが、よくは分からない。大城台と深い谷によって隔たれているので、谷は空堀の役目となり、字名「堰上」から反対側の広がる水田は、養老川の氾濫による堰が堀の役目を担っていたともいえそうである。神社の境内には、さらに一段と高い場所がある。それこそ「堰上」である。登ると周辺が一望できて、見晴らしの良い場所である。ここは、望楼(見張り台)があった処という説もある。

市原郡誌の「玉前神社」の項に、「當社は土宇區字堰上一四七九番地に鎮座し、～同社は応永二十四年(1417)の創建にして千手観音なりと、當時北条高時入道の三男新七郎當地に降り、吉野と名乗る、大和國塔の峰よりも持参せしものなりといふ、これ當地の草分けの一家にして、現吉野と稱するものの祖先なりと、當地に蔵王堂と唱ふるものあり、何等か因縁あるらしく思はる」とある。「大和國塔とか蔵王」と南朝期の吉野山を想わせることでもあるが、このことを伝えるものは皆無である、二日市場の住人の吉野洋一郎氏にも窺っても何の伝承もないということであり、この地の吉野姓の人たちも全く話として聞いたことも無いらしい。昔あった伝承が途切れたかも、この北条氏の領地に南朝から逃れてきた鎌倉幕府の家人たちという話が、伝承として発展していったのかもしれない。しかしここは鎌倉時代、北条氏一族の支配下であった史実の微かな痕跡が、結びついたともいえる記事でもある。玉前神社が現土宇と高坂に存在することも、この時代の同じ領主が領地の守護のため勧請した神社に違いない。

北条得宗家の系図

